

ほん

『大介護時代を生きる 長生きを心から喜べる社会へ』

樋口恵子 著

中央法規出版

2012年12月10日発行

1680円 税別

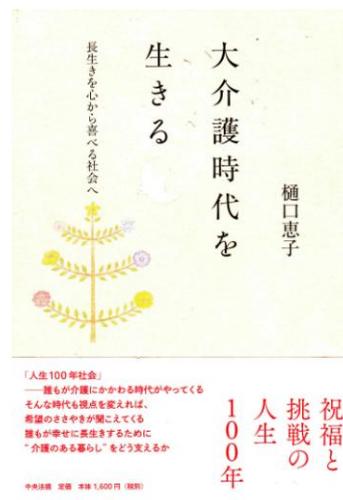
第1章 “福祉の国” “重税の国”を訪れて

第2章 大介護時代のケアは総力戦で

第3章 大介護時代の到来

第4章 家族が変われば介護も変わる

第5章 聞こえてくる希望のささやき



[評者 尾崎美千生]

本書の著者樋口恵子さんは、女性問題や高齢化問題で数々の活躍の過程で名文句を吐いてきた評論家である。樋口さんが昨年暮れに筆を下した『大介護時代を生きる』には、これまで代表を務めてきたNGO「高齢社会をよくする女性の会」や、政府審議会などの舞台上で舌鋒を欲しいままにしてきた名文句は多用されていない。どうやら最近の樋口氏、男性陣の力量不足か、同情心のなせるわざか、「粗大ごみ」「濡れ落ち葉」など男性優位社会・日本をくすぐってきた名フレーズに控えめである。

高齢化のスピード世界一という日本の現状の中で何と言っても樋口氏の口端にのぼった真骨頂は「老婆は一日にしてならず」であると筆者は思う。『大介護時代』はまさに女性の犠牲の上に築かれてきた古(いにしえ)から、戦後の高度経済成長時代を裏で支えてきた女性たちの忍従と、やがて「人生100年時代」を担う女性たちの栄光と覚悟の物語である。

少し前までは「三世帯世帯」であった社会は1. おふたり様老夫婦 2. おひとりさま 3. 未婚の子どもと住む高齢者へと移り変わり、それにつれて介護役も変わっていく。そんな社会では多様な分野にそれぞれが能力を活かして出来るだけ大勢が参画する方向へ、そして費用を分担する方向へ社会全体のギアを切り換える必要があると説く。そして老いという弱さを認め合いながら支え合う方法を、人々をつなぐ方法を見つけることができたなら老いが持つ脆弱性は社会全体のしなやかな強靱性に転換可能ではないかと問いかける。

「人生100年社会の常識づくりに汗を流すことは、血を流し合った戦争の世紀を終えてやっとたどりついた平和の証である」との老婆の感慨を吐露している。そこには80歳に達した一人の人間の日常の生活や、スウェーデン、フィンランドでの現地で見聞した人間の営みが説明要因として使われている。そこにはもはや性的役割分担を超えて「男介の世代」への呼びかけもある。